

平成 30 年度第 1 回 立川市文化振興推進委員会 会議録（要旨）

開催日時	平成 30 年 8 月 20 日（月曜日） 午前 10 時～12 時
開催場所	立川市役所 103 会議室
次第	<ol style="list-style-type: none"> 1. 開会 2. 立川市の主な文化振興の取組 3. 意見交換 4. その他
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第 3 次文化振興計画 平成 30 年度の主な取組状況 ・ 多摩フレッシュ音楽コンサート 2018 パンフレット ・ 文化振興推進委員会の進め方について ・ A 委員資料（公益社団法人立川青年会議所のご案内） ・ B 委員資料（たちかわ創造者関連パンフレット 3 点） ・ C 委員資料（高松学習館関連資料 2 点） ・ 立川市地域文化振興財団関連資料（小学校音楽キャラバンほか 2 点） ・ 副委員長資料（国立音楽大学の学生によるお話と演奏） ・ 立川市文化振興推進委員会委員名簿 ・ 平成 29 年度第 2 回立川市文化振興推進委員会会議録（要旨）案
出席者	<p>[委員]（敬称略）</p> <p>今井良朗（委員長）、酒井美恵子（副委員長）、伊東功、高木誠、中込遊里、蓮池奈緒子、堀江けんいち、宮田龍之介、綿引康司</p> <p>[事務局]</p> <p>渡辺晶彦（産業文化スポーツ部長）、比留間幸広（地域文化課長）、加登義明（地域文化振興財団事務局長）、柳澤彰子（文化振興係長）、二ノ宮真輝（文化振興係）</p>
公開及び非公開	公開
会議結果	「未来の担い手 子どもたちへ」について、意見交換を行った。
担当	産業文化スポーツ部地域文化課文化振興係 電話 042 - 506 - 0012

1. 開会

- ・委員長の司会により開会
- ・地域文化課長より、地域文化課長、地域文化振興財団事務局長の異動についてご案内。
- ・事務局より、資料について確認があった。
- ・配布資料の名簿についてB委員の肩書を「あうるすぽっと（としま未来文化財団）」に修正。
副委員長の肩書を「教授」に修正。

2. 立川市の主な文化振興の取組

- ・事務局より、第3次文化振興計画に基づく、平成30年度の主な文化振興の取り組みについて、資料の説明があった。
- ・資料7ページ記載の「■市史編さん事業」について、「3月に関連講演会を実施」を「1月19日に関連講演会を実施」に修正。

3. 意見交換

- ・前回会議、平成29年度の第二回文化振興推進委員会の中で時間が足りなかった、多摩フレッシュ音楽コンサートについての説明が加登財団事務局長よりなされた。

(事務局) 多摩フレッシュ音楽コンサートの主催者は東京都多摩公立文化施設

協議会。平成5年の多摩地域の東京移管100周年を記念して始まった。多い年で声楽、ピアノ、弦楽、管楽の4部門によるコンクール形式の演奏会。入賞者は入賞者リサイタルやロビーコンサート等の機会を得られる等、若手演奏家に活躍の場を提供することを一つの目的としている。入賞者の中には、その後著名になられたアーティストもいる。

(副委員長) 若手が活躍する場があって非常に嬉しく思う。

- ・続いて「未来の担い手 子どもたちへ」について、意見交換を行った。

[意見交換]

(委員長) 本日のテーマである、未来の担い手・子ども達について、意見交換を行いたい。

はじめにA委員の行われている取り組みについてお話を伺いたい。

(A委員) 立川青年会議所の取り組みについて説明する。立川青年会議所は立川、国立、武蔵村山の三市をエリアとする、経営者を中心とした20歳～40歳までの青年経済人の集まり。2013年より公益社団法人になり、予算比率として55%の公益事業を実施している。青少年育成事業であるキッズドリームチャレンジは2014年に開始。様々な職種の職業体験を通じて子どもたちの自己肯定感と地域愛を育むことを目的にしている。これまで屋内のダンスフェスティバルや屋外でのイベントなどを実施してきて2018年で4年になる。

次に「SDGs」について説明したい。立川青年会議所では子ども達が自分で考えた立川市内の環境問題を議員の前で発表する取り組みを行っており、環境省から表彰を頂くなど大きな反響を得ている。今後も取り組みは継続していく予定。

(D委員) キッズドリームチャレンジについて、体験する職業ごとの人気・不人気は？

(A委員) ファッションデザイナー、ヘアメイク、アナウンサーなどに人気偏った。分散させるため、146人の募集者全員に親御さんを含めて説得・交渉をした。

(委員長) こういった取り組みは他地域の青年会議所などでも行われている？

(A委員) 珍しい取り組みだと思う。他地域の青年会議所から問い合わせが来ることもある。

(委員長) キッズドリームチャレンジの対象年齢は？

(A委員) 小学校の4～6年生を対象にしている。

「地域の事を知る事」によって文化芸術に触れる機会も増える。

(委員長) 現状では対象者が小学校高学年だが、中高生や、小学校低学年、入学前の子どもに対しても取り組みが広がっていくことを期待したい。欧米では職業に限らず様々な体験・経験が出来るミュージアムがあるが、国内には未だ少ない。

(副委員長) 2014年の参加者は現在高校生になっていると思うが、その後は？

(A委員) 当初は1年目で事業を辞めようと思っていたが、親御さんから是非と言われ続けている。1年目の参加者の中には、ボランティアとして事業に協力してくれている人もいる。

(委員長) 続いて、D委員の行われている取り組みについてお話を伺いたい。

(D委員) 7カ月間に及ぶワークショップの活動と5月に行われたの発表会の様子を動画でご説明したい。

・動画を上映し、取り組みの説明を行った。

(D委員) 1月から7月までのワークショップには中学校1年生から～大学1年生の合計61名が参加。7月24日の発表会には43名が出演し、内訳としては男15名、女28名。高校生は1年生が23名、2年生が14名、3年生が3名、中学生2年生・3年生がそれぞれ1名、大学生が1名。参加者の住所は多摩地域内の各所。当日は14時の回に99名、19時の回に131名の合計230名が来場した。参加した学生からは「他校と関わっていくのが楽しく、貴重な体験だった」との感想が多い。来年も1月から長期間のワークショップを実施する予定。最終的には立川市を拠点にしつつ、多摩地域の各所に活動の幅を広げていきたい。

(委員長) 委員の皆さんから、質問をお願いしたい。

(C委員) 感想になってしまうが、自身も同様の活動の実行委員長を担っていたことがあり、感慨深かった。

(D委員) ありがとうございます。

(A委員) 参加者は演劇の素人が多い？

(D委員) 日野台高校、府中高校、日野高校の演劇部が部活動単位で参加してくれた。演劇部以外の参加者はごく僅か。入部したての演劇が上手じゃない参加者も多かったものの、発表会をやりきることが出来た。

(委員長) こういった活動はありそうでない。演劇をやりたい人にとって貴重な機会になる。

(E委員) 将来的に演劇を続けたい人にとっての受け皿は？

(D委員) 演劇で食べていくことは難しい。事業に参加している中高生は、将来はなんでもいから舞台に立ちたい、大学に進学して演劇をやりたいという人が多く、演劇に関係するスタッフをやりたい、音響のプロになりたい、といった中高生もいた。

(E委員) 活力と意欲のある中高生の時期にこうした活動に参加できるのは非常に良い。

- (C委員) 事業を通じて交流が生まれて、お互いに伸ばしあう、育てあう事が出来たのでは。人と人との関わり合いの場になったことは参加者にとっての大きな財産になったと思う。
- (事務局) 大変良い取り組みであると感じた。今の中高生にとっての演劇の発表の場はどれほどあるのか。今後「たちかわ創造舎」などが演劇の拠点になっていくと良いのでは。
- (F委員) 事業の予算は？
- (D委員) 立川文化芸術のまちづくり事業補助金の助成を受ける予定。また、各校の演劇部から予算に応じた活動費を得ており、その他参加費などの収入がある。当初の予定よりも支出が増えてしまったが、市民会館の使用料の減免もあってなんとか黒字を保っている。今後は参加費を工夫するか補助金・助成金を増やす必要がある。
- (委員長) 演劇は体で考える、体で思考するのが面白い。
- (G委員) これからの企業は文化芸術によって培われる「創造性」を持った人材を求めていると感じる。

(委員長) 続いて、B委員の行われている取り組みについてお話を伺いたい。

(B委員) たちかわ創造舎の運営母体であるNPO法人アートネットワークジャパンの理事長を経て、現在は公益財団法人としま未来財団に所属。豊島区では主にF1層をターゲットにした女性に優しい施策を展開しているが、その中で文化が何を出来るか、何をすべきかを考えている。

としま未来財団では先日、0歳児からフルオーケストラを聞けるという企画を東京芸術劇場で実施。0歳児連れの家族1,600人が来場し、ベビーカーは230台だった。幼い子ども連れのファミリー層が文化に親しみやすい環境が整いつつあるとも思うが、今回この場で考えていきたいのは、ファミリー層をターゲットにした企画は既に飽和状態であり、お客様の取り合いになっている状況で、事業の持続・接続をどのようにすべきか、ということ。

そのために必要なことの一つ目が予算。一過性のものとしなないための予算取りの工夫が必要。二つ目が、家でも学校・職場でもないサードプレイスを作り上げること。それが今回のテーマである、未来の担い手である子どもの教育・育成に繋がってくると思う。三つ目が企画の強度。目標が明確でわかりやすく、思いが強いことが重要だと感じる。

(D委員) 豊島区ではこういった企画が多い？

(B委員) 体験できるものや、ワークショップが多い。自身の財団で持っている劇場が会場になる他、地域の生涯学習施設で行われているものも多い。いくつかある取り組みを横で繋いで、ターゲットと時期を見直すとより良くなるのではと感じている。企画の分散に伴い予算も分散しているため、予算を取り合っている状況になっている。

もう一つ考えているのが、教育分野との関連について。ファーレ立川アートは市の教育に取り込まれているため、公立の小学校5年生は全員鑑賞することになるが、立川シアタープロジェクトで実施している子どもと大人と一緒に楽しむ舞台では、鑑賞費用が廉価に抑えられているとはいえ、両親の興味関心の度合いで子どもの観劇環境に差が生じてしまう。教育に文化芸術をいかに組み込んでいくか、その時期はいつが良いのか、についても検討の余地がある。

- (委員長) サードプレイスが重要であると同時に、機会が常に無いとサードプレイスも生きてこない。機会を常に創出するため、文化芸術を教育に組み込むには予算の問題が生じる。
- (事務局) 豊島区ではNPOと行政がどのように連携している？
- (B委員) 2018年の3月までNPO法人を運営していた。NPO法人が企画と予算を考え、市と実行委員会形式を組んで補助金申請を行うといった、対等な関係で役割分担を行う方法がある。
- (委員長) 演劇、音楽は良し悪しがはっきりしている。美術は判断が難しい。
- (G委員) 以前豊島区に住んでいたことがあるが、芸術劇場が出来てから変わったように思う。文化芸術はまちのイメージ向上にも繋がる。
- (委員長) 「企画の強度」の話が先ほど出たが、立川市にも専門家が多いので人が繋がれば良い企画が生まれるのでは。
- (委員長) 続いてC委員よりお話を伺いたい。
- (C委員) 学習館は2017年で70周年。市内の学習館は6か所、学習等共用施設は11か所、児童館は市立が8か所、私立が1か所。
市内の6つの学習館ではそれぞれ特色のある取り組みを行っており、高松学習館で行っている取り組みには、これからの教育の先どり、地域学校との活発な連携、高松児童館との協働事業、誰でも参加出来る、という特色がある。
学習館に関連した話題としての関心事は、施設全般に言えることとして、利用者が右肩下がりである、ということ。行政主体でPRをすれば改善されるのかもしれないが、所在地と名称が一致していない、という問題が原因の一つであると思う。
- (事務局) 学習館を行政主体でPR、という内容について生涯学習推進センター長に報告したい。

4. その他

- ・事務局から、次回平成30年度第二回の会議から、第4次文化振興推進計画についての話し合いを始める予定であることを説明。
- ・次回平成30年度第二回の会議で各委員は任期満了になるが、計画の策定に際して引き続きご協力をいただきたい旨を説明。
- ・副委員長の挨拶によって閉会。

以上